

特別論稿

世界歴史とは何か

—科学的な世界歴史の構築を目指して—

加藤 幸信

〈目次〉

はじめに

- (1) 世界歴史とは
- (2) 国家と社会
- (3) 文化とは
- (4) ヘーゲルの説く世界歴史
- (5) 学の形式と一般論
- (6) 世界歴史の意義
- (7) 唯物論と観念論

はじめに

世界歴史ときくと、多くの人は高校で学んだ世界歴史や書店や図書館で見かける世界歴史と称する書の内容を思い浮かべることであろう。そうした世界歴史のイメージからすれば、本論で説かれる世界歴史は極めて異質なものと映ることと思われる。

しかし、筆者とても最初から異質なものを目指したわけではなく、また後述するように、外見はともかくその内実は極めて正統なものだと自負している。

筆者の世界歴史の出発点は高校での世界歴史の学びであり、それに続く大学での西洋史等の歴史の学びであった。そして、その根底には欧米文化への憧れがあった。

筆者は、当時はまだ学問と技術の区別も文化と技術の区別もつかぬ有様であったから、当時華々しく宇宙開発を進めるアメリカの技術力を世界の最先端の学問、文化であると思い込み、アメリカやその母体となったヨーロッパに対する強烈的な憧れを有した

のである。

アメリカやヨーロッパがどのような道のりを歩んで世界の最先端たる学問、文化を築き上げたのか、その過程、歴史に関心をいだいたのが筆者の高校時代であり、世界歴史への興味の発端と言えよう。とはいえ、高校時代の世界歴史の学びは、受験勉強レベルの域を超えるものではなかった。

東京大学に進学すると、高名な歴史研究者が何名もおり、教養課程からそうした研究者の講義を聴くことができた。さっそく、講義に出席はしたものの、筆者の関心がアメリカ等の最先端の学問・文化がどのようにして誕生してきたのかという歴史の流れであるのに対して、大学の研究者の説くことは、中世の教会に残る資料うんぬんといったこと細かい事実の確定の話や、時代、地域の特殊性を強調するような話ばかりであった。

たとえば、ある研究者は、「歴史とは、現代と大きく異なる世界を見ることによって、現代の特質、特殊性を浮き彫りにする鏡である」という趣旨のことを説いた。

一方で偶然のことから足を踏み入れた真の学問の世界では、細かな事実や区別あるいは特殊性ばかりを重視するかのような大学とは対照的に、世界全体の運動、発展を見てとる弁証法が強調されていた。そして、論理という対象の持つ共通性を見てとることの重要性、区別ばかりでなく同時につながりを見ることの重要性が、学問を目指す人間に対して説かれていた。

私は幸運にもここで学ぶことを許されたが、ここで滝村隆一氏の発展史観と出会い、これこそが本当の世界歴史であり歴史理論であると思ひ込み、滝村氏の書に随分と学ぶこととなった。大学等の歴史研究者は貴重な事実は数多く提供してくれるものの、そうした事実を駆使する滝村氏こそが真の学者だと思われたことである。

けれども、弁証法の学びが進むにつれ、滝村氏の発展史観の見事さが更に理解出来るようになった半面、発展史観が特殊性、区別を強調したものであることも少しずつ見えてきた。これには、ここで詳しく説く余裕はないものの、意外なことにこれも偶然のことから参加した生命体の歴史の究明が大きく役立つことになり、同時に世界全体を対象とする哲学や弁証法の有効性、ヘーゲルといった哲学者の偉大性を改めて思い知ることとなった。（この生命体の歴史の概要は『看護のための「いのちの歴史」の物語』現代社発行 として発表済み）

こうして、滝村氏の発展史観は、アジア的国家、古代的国家、中世的国家といったそれぞれに「部族国家」から発展成立した世界史的国家を並べたものであり、世界歴史の流れそのものを説いたものではないらしいということが見えてきたのである。滝村氏の発展史観ではアジア的と古代的を結ぶものは説かれていない。つまり区別はあっても連関はなく、それぞれの特殊性を強調するものだったのである。

端的に述べれば、古代国家が部族国家から発展したことは説かれても、アジア的から古代的への流れは説かれていないのである。

また、滝村氏は、モルガンの原始共同体に関わる説を「たんに個別歴史的諸民族の先史的段階で共通にみられた歴史的段階というにすぎない」（『国家の本質と起源』）勁草書房とあっさり切り捨てるだけで、これに代わる原始共同体論は提出していない。推測するに、特殊性を重視する滝村氏からすれば、まだ特殊性が充分に開花していないような原始共同体などは究明の対象外ということなのであろう。しかし、本来は原始共同体の究明こそが世界歴史を

解く鍵となるはずのものである。

このように説いてくると「他人の批評ばかりしているようだが、それではお前は世界歴史をどう説くのか」という声が聞こえてきそうである。それに対する答えが、以下の本論になる。

ただし、念のために断っておけば、これは滝村氏等の説に対するアンチテーゼではない。滝村氏の著作の学びをはじめとし、本論の成否は別として、そもそも上記にあげた歴史の学びの過程が筆者になれば、本論は成立しえなかつたはずである。

冒頭に述べたように、本論は読者の目にはいささか以上に異質で特異なものとして映るであろうが、上記のような学問の学び、歴史の学びを踏まえているだけに、筆者としては本論の内実は正統なものだと自負している次第である。

（1） 世界歴史とは

世界歴史とは人類の歴史であり、我々人類が社会的労働によって地球との相互浸透をはかり、自らの手で自らを発展させてきた道のりを、社会的な生活およびその中核をなす文化に焦点を当てて説くものである。

世界歴史とは人類の歴史であるということについては、大方の異存はないであろう。しかしここで言う人類とは、あくまで人類に至るまでの生命体の進化、発展を受け継いで誕生した人類という意味である。

つまり、人類の歴史は生命体の歴史の続編、後編ということであり、マルクス風に言えば、人類の前段階である猿類までで地球の歴史の前史が終わることになる。しかし、ここで肝心なことは、この後編は単に前編の続きだということにとどまるのではなく、前編の理解が後編の理解を左右することである。というのも、生命体の進化、発展の結果誕生した人類は、生命体の進化、発展の道を経た人類として、人類的に踏襲せざるをえないのであって、生命体の歴史と人類の歴史は本質的には同一のものだと言えるからである。その本質とは一体何かと言えば、冒頭に説いた地球との相互浸透ということである。

ある。

さらに、人類の人類たる所以を理解するためにも、猿類までの歴史の理解がやはり不可欠となる。如何に人類が猿類までの生命体とかけ離れているかのように見えようとも、人類は猿類までの生命体が進化したものでしかないからである。したがって、猿類までの生命体を理解していなければ、何がどう進化して人類となったのかという、その進化の中身、言い換えれば人類の骨組みが理解できなくなってしまう。

この二重の意味で人類の歴史は生命体の歴史の続編、後編なのである。

このように説いてくると「なんだか、今までの世界歴史といわれるものと随分と違うような気がするけれども」という不審の声があがるかもしれない。しかし、まずは我々の説くことに耳を傾けてほしい。

話を続けよう。冒頭に説いた人類の歴史うんぬんに続く「社会的労働によって…」以下に説かれる相互浸透のありかたが、人類の歴史の人類の歴史たる所以である。ここで「相互浸透」とは弁証法の用語であり、ごくわかりやすく言えば、つながりあっているものがお互いに相手の性質、相手のもっているものを受け取りながら発展していく、このような関係を深める形で発展がなされていく、ということである。

人類の前段階である猿類までの歴史も地球と生命体との相互浸透による進化、発展の歴史であったが、猿類までは本能に基づく活動であり、地球の発展に受動的に合せての地球との相互浸透であった。

それに対して、人類の人類たる所以は、労働という目的意識的活動を行なうところにある。人類は、頭の中に目的という像を描き、それに現実を一致させるべく活動を行なう。地球の発展に受動的に合わせるのではなく、地球を自分の目的に合わせて変革していくのである。これを個々ではなく集団的労働すなわち共働として行なうのである。これが社会的労働ということである。人類の場合には、社会的労働という形で地球との相互浸透を行なってきたので

ある。

この社会的労働を実体的な面から把握すると社会的生活ということであり、社会的生活を基盤として誕生、発展し社会的生活を統括している認識の面に焦点を当てた場合に、これを文化とよぶのである。

世界歴史は、こうした人類の社会的労働、社会的生活、文化の歴史を説くことによって、人類がその誕生から現在に至るまでに歩んできた道のりを明らかにするものである。

(2) 国家と社会

さて、右に社会的労働うんぬんと説いてきたが、実は、人間は国家という枠組みにおいてしか存在できない。もう少し詳しく説くと、社会というものは国家という枠組みがないと存在し得ないのである。

これは、たとえてみれば、水がビンやカンといった枠組みがないと安定して存在し得ないのと、あるいは川という枠組みが存在しないと水が流れない、川という枠組みと共に水が流れ、枠組みと共に発展していくようなものである。

したがって、労働は現象としては国家に統括された共働、国家的労働である。古代の治水灌漑も国家の主導によって行なわれたし、国境を越えて活動しているかに見える現代の多国籍企業の活動も、現実には進出先の国家の法律に合わせて活動する、つまり進出先の国家という枠組みの中で活動するよりほかにない。

この意味で人間の生活は国家的生活として存在する。世界歴史は、直接には国家的労働として存在する社会的労働を説くのである。

どういうことかと言えば、人間の生活は国家的生活であっても、人間全体つまり人類としては国家の枠を超えて共働を行なってきたということである。たとえば、我々の生活は日本という国家の枠組みの中で行なわれている国家的生活であるが、一年を十二月に分けるとか七日をまとめて一週間という単位にするといった暦の基本的なあり方は古代オリエンで成立したものである。我々がそれを受け継い

で生活しているということが共働の一つのあり方なのであり、これは歴史的な共働ともよぶべきものである。

人間の人間たる所以は労働、共働にあり、人間が国家という枠組みにおいてしか存在し得ない以上は、労働、共働も国家的労働、国家的共働として存在する。けれども、国家はあくまで、労働、共働をまとめあげる枠組みであり、その実質的内容が共働であり、共働を行なっている集団が社会である。だから、家庭とか地域といった具合に、国家の枠組みの下部の単位での共働もあるし、肝心なことは、上述のように国家の枠組みを超えた人類という類的レベルでの共働、共働の発展が存在するということである。これが世界歴史が説くところの社会的労働である。先の例で言えば、川の水、水量が社会的労働ということになる。

世界歴史は国家的労働、つまり国家の活動そのものを説くのではなく、国家の活動として現象しながらも個別の国家の枠組みを超えて発展していく社会的労働の歴史を説くものであり、社会的生活の歴史を説くものである。

このように説いていくと、「なぜ社会とか国家ということにこだわるのか、それよりもはやく世界歴史の具体的な流れを説いたらどうだ」という声があがるかもしれない。しかし、これは世界歴史を説く上で避けては通れない極めて重要な問題なのである。

社会は国家という形でしか直接的には存在できない。より正確に言えば、社会は国家として実存する、国家は社会の実存形態であるということである。これはたとえてみれば、哲学は直接的には個人の学説という形でしか存在できないというようなことである。

つまり、哲学は直接的にはカントの学説、ヘーゲルの学説といった形でしか存在しないのである。では哲学の歴史とは「カントはこのように説いた」「ヘーゲルの説はこうである」といった具合に、哲学者とされる個々人の学説の歴史を説くものなのだろうか、それとも、個々人の学説を越えた哲学の発展の道

りを説くものだろうか。それにしても、個々人の学説以外には哲学は存在しないのに、個々人の学説を超えた哲学の発展の道のりなどというものが存在するのだろうか。

社会と国家という問題はこうした問題につながるのである。これまでの世界歴史と称する書は、例外的なものを除けば、国家に焦点を当てたものである。つまり、地域ごと、時代ごとにさまざまな国家の歴史を説いた言わば国家の歴史の集積体とも言うべきものであった。理由は簡単で、世界歴史とか人類の歴史といったところで、すでに説いてきたように人間の生活が国家的生活でしかない以上、現象形態としては国家の歴史、国家の枠組み内の歴史以外には歴史は存在しないからである。もっとも、こうした国家中心、政治中心の歴史に対する反発として「民衆の歴史」ということを主張するものもいるが、これとて国家の枠組みの中の民衆でしかない。

しかし、我々が目指すものは国家の枠組みを超えた人類の歩みの道のりを説くことなのである。先の例で言えば、個々の川の流れを個々として説くのではなく、一本の流れとして、源の水滴、小さな源流が幾度となく川の変えながら大河として海（現在）にまで流れこむ姿を説くのである。したがって、そこを流れるものもこれまで世界歴史と称するものが説いてきたものとは異なるのである。

(3) 文化とは

話を戻して、右に説いてきた社会的労働は社会的生活という形をとる。常識的な意味での労働つまり生活に必要なものを獲得したり創り出したりすることも労働の一形態であるが、これだけが労働ということではない。これらを含めた人間の生活すべてが労働である。しかし、社会的生活は社会的労働の実体的な面でしかない。すでに繰り返し説いたように、労働とは人間の目的意識的活動であり、我々人間の活動はこの目的意識的に基づいてなされている。ここで重要なことは、この目的意識は個人個人の頭の中にしか存在しないとは言え、共働の産物であり、

社会全体に共通の規範、知識、考え方等として存在する、全体として統括されているということである。だからこそ、逆に共働が成立するのである。したがって、こうした知識を欠いた者は社会常識に欠けると非難され、規範を破った者は国家の制裁を受けるということになる。

常識的には、文化とは絵画や音楽、文学といった芸術的なものを指す。しかし、ここでいう文化とは、社会的な生活から生まれ社会的生活を統括する認識であり、人類の歴史はこの文化の歴史でもある。

(4) ヘーゲルの説く世界歴史

このように説いてくると「高校で学んだ世界歴史とも現在多数刊行されている世界歴史の書の内容ともあまりにも異なるような気がする」という声がいよいよ強くなることだろう。

しかし、これは教科書も含めて現今の世界歴史と称する書が社会の実存形態である個々の国家の現象形態ばかりを追いかけて、その内容の成否を問う前に、世界歴史というレベルに達していないからである。個々の国家の現象形態のみを追うのであれば、前述のようにさまざまな国家の歴史、地域の歴史の集積体となるのみであって、学としての形式を満たせず、国家の枠を超えた世界歴史の大まかな流れ、一体何が流れているのかが浮かんでこないということになる。

そうした中で、唯一世界歴史の名に値するものがドイツの大哲学者ヘーゲルの説いた『歴史哲学』である。ヘーゲルは、観念論の立場から世界歴史について以下のように説いているが、これを唯物論の立場から説きなおせば、我々の一般論と一致するのである。

「…精神は自分自身の本性の評価であり、したがって同時に自分自身に戻る活動性であり、その意味で自分を産み出し、自分を本来の自分とするところの活動性だからである。そこで、このような抽象的規定からして、世界史について云うことができる。世界史とは、精神が本来持っているも

の知識を精神自身で獲得して行く過程の叙述である、と」（ヘーゲル、武市健人訳『歴史哲学』上巻、岩波書店。ただし旧字体を新字体に変更した。以下の引用文も同様。）

「冒頭の一般論とは全然違うように思われるが、一体どこが一致するのか」という声があがりそうなので、ヘーゲルの文章を簡単に解説しておこう。

ここでヘーゲルの説いていることは、一言で言ってしまうえば、世界歴史とは精神（＝世界の大本としての精神）の発展していく一連の流れを説くものだという事である。我々の説く世界歴史からすると文化の発展ということヘーゲルはここで説いているのであり、ヘーゲルにとって世界歴史とは決して諸々の国家の歴史の集合体ではないのである。

ヘーゲルは観念論の立場、つまりこの世界の大本は観念、精神だとする立場に立つから、精神の発展と言うことは、精神が自分自身について知り、自分の正体に気づいて自分らしく振舞うということである。

これを戯画的に言えば、王宮で生まれ国王となるべき宿命を背負った皇太子が、育つにつれて自分の立場に対する自覚が生まれ、その分だけ国王の後継者らしく振舞い、最後には国王になって国王として振舞う、というようなものである。（もちろんこれは乱暴なたとえであるが）本来国王であるはずのものが国王になっていく過程であるから、自分自身に返るとか自分を産み出すということになるのである。

ヘーゲルの『歴史哲学』は見事なものであるが、観念論の立場で説いたものであるだけにいくつかの大きな問題点が存在する。詳細は唯物論と観念論の違いを説いた上で説かなければならないが、たとえば世界歴史が「精神が本来持っているものの知識を精神自身で獲得して行く過程の叙述である」とするならば、なぜ世界歴史は遍歴とも言えるような数奇な流れを見せるのか、ということである。ヘーゲル自身も「世界精神そのものは、これらの諸形式を時間の長大なひろがりのなかで遍歴し」と説いている

のである。(58頁の引用参照)

これは先ほどのたとえで言えば、皇太子が国王になるだけなのに、なぜか国から追放されて諸国を遍歴した挙句にやっと国王につく、というようなものである。なぜ遍歴するのか、遍歴に意味があるのだろうか。

しかし、ここでまず指摘しておくべきことは、ヘーゲルは本来一体として説かなければならないものを、『歴史哲学』、『哲学史』といった具合に分けて説いてしまったということである。これは、本来一体であり、それゆえ一体としてしか説けないはずの地球と生命体の歴史を、『地球の歴史』『生命体の歴史』という具合に分けて説くようなものである。

ではなぜ分けて説いてはまずいのか。生命体で説けば、生命体は地球から生まれ地球との相互浸透をしたからこそ進化・発展した。それを地球と生命体とを分けて説けば相互浸透がきちん説けず、進化・発展が説けなくなるからである。

現在の生物研究者は、生命体と地球との関係を相互浸透として把えられず、単に生命体が地球に合わせて進化・発展したかのように錯覚している。しかし、生命体と地球が相互浸透しお互いに創りあった面があるからこそ、生命体の進化・発展が可能になったのである。

どういうことかと言えば、生命体は単に地球に合わせたのではなく、それまで生命体として培ってきた実力で自分の環境を切り拓き(地球を創りあげ)、それと共に培ってきた実力をもう一度鍛え上げると共に実力を発展させてきたということである。

ただ、陸に上陸して環境が変わったとか、隕石が降ってきたというのでは、実力の養成、再養成、実力の発展ということにははかれない。対象に合わせただけでは駄目なのである。

これは、もちろん世界歴史でも個人でも同様である。会社なり組合なりを自分で創り、組織と相互浸透させながら自分の実力、組織の実力を向上させてきた初代と組織を受け継いだ二代目以降とは実力が違うのである。

学問で言えば、実力を培い、その培った実力をもう一度鍛え上げる形で学説を創りながら実力を発展させた、自分の実力と学説を相互浸透させた人間と、学説を受け継いだだけの人間とは実力が違うのである。

冒頭に説いた「地球との相互浸透」とは、実はこうした内容を含んでいるのである。

「哲学」と「世界歴史」も同様であり、切り離れたのではどちらの発展もきちんと説ききれなくなる。哲学と国家的な生活とは違うということにはならないのである。これは、支配者が目まぐるしく変わり、しっかりとした権威が確立しなかったイギリスで経験論哲学が生まれたこと、移民の国アメリカでは、名称としてはともかく実質的に哲学と言えるほどのものが誕生しなかったことをみればわかるであろう。

しかし、右のように説いてくれば「随分と独善的な物言いであるが、自分だけが正しいとする根拠は何か」といった感情的な反発の声や、「学の形式などということは今まで聞いたことがないが、そのようなものが本当にあるのか」といった疑問の声がただちにあがることになる。前者の感情的な反発に対しては、この後の展開を読んでもらうしかないが、後者の疑問は世界歴史の理解に関わることであるから、ここで少し答えておくことにしよう。

(5) 学の形式と一般論

「学の形式と言われてもさっぱりイメージがわからない」と言う人間も少なくはないだろう。しかし、何事にも形式と内容が存在するものである。

学とは何かと言えば、一般論(本質論)に統括された論理の体系である。論理とは何かを簡単に言えば、事実や現象そのものではなく、事実や現象の言わば背後にある骨組みに関わる認識である。

この背後の骨組み、性質を部分的にではなく、対象とするもの全部に共通する骨組み、性質として把え返したものが論理である。そして、自分の専門とする学的分野全体を貫く骨組み、性質を把えたものが一般論ということになる。

たとえば万有引力の法則といった法則なども論理

である。しかし、これは物理学の分野全体に関する論理ではないので、物理学の一般論とは言わない。

こうした一般論を頂点とした論理の体系が学である。だから、一般論がないものは学の形式を満たしているとは言えない。まして、事実とか現象形態のみを取り扱っているものは、学とはほど遠い位置にあると言わなければならない。これが、本論の冒頭に世界歴史とは何か、つまり世界歴史の一般論を提示した所以である。

ではなぜ一般論が重要かと言えば、一般論が学を統括するものだからである。我々が対象とする専門分野はたとえば政治にしろ、あるいは経済にしろ物理にしろ、この世界の一面を対象とするものでしかない。あらかじめここが政治の分野であり、ここが経済の分野と分かれているわけでも、政治の問題とか政治現象というものがあるわけでもない。あるものをどう捉えるか、政治として捉えるのか経済として捉えるのか政治経済として捉えるのか、ということとは捉える本人の認識に関わってくる問題なのである。

したがって、自分は自分の専門分野をどう捉えているのか、どういうものを専門分野としているのかという一般論を説き、そこからその分野に関わるすべての問題を説かなければ、全体の統一性がなくなってしまう。一般論があってこそ、何を学の対象とするかがはっきりするし、対象をどのように捉えるかも決まってくるのである。同じものを対象としたとしても、見方によって、つまり一般論によって見えてくるものが違って来るし、答えも違って来るのである。それゆえに、一般論が提示されていないものは、学という名称をつけていても、学とは言えないのである。

これらのことを世界歴史で説けば以下のようになる。世界歴史とか人類の歴史と言ったところで、これらのものが直接に現象しているわけではない。つまり、世界歴史とか人類の歴史は直接には見えないのである。現象しているものは、栄枯盛衰を繰り返す様々な地域の様々な国家でしかない。したがって、地域史や各国史といったものであれば、直接現象しているも

のを見てとることによって、つまり、この国、この地域では何年にはこんな戦争があり、何年にはこんな王朝が成立したと言うことを見てとることによって、何とかそれらしく叙述することも可能である。

しかし、世界歴史は現象していないだけにそうはいかない。世界歴史は人類の歴史だということを説くところまでは可能なのだが、人類という民族はどこにも存在していないのであり、このままではその先に一步も進めない。結局のところは、各国史や地域史といったものの主要なものだけでも集めよう、ということになるのである。

これは単なる比喻や憶測ではなく、事実として日本を代表するとも言える世界歴史の第一巻の冒頭には、オリエント世界の歴史は他のどこの地域の歴史とも異なるというオリエント世界の独自性が説かれているのである。

「『オリエント』は、世界史上において『ヨーロッパ世界』や『東アジア世界』とともに、一つの完結した歴史的世界をなしている。この世界の歴史は、『ヨーロッパ世界』や『東アジア世界』とは全く独立して生成・発展をとげてきたもので、他の二つの歴史世界とは全く異質な独特な歴史的世界をなしている。」(杉 勇他『岩波講座 世界歴史』(旧版)第一巻)

このように「完結」だの「独立」だの「独特」だのといったことばかりを強調したのでは、この書は各国史、地域史の寄せ集めであり、世界歴史という一つの筋を通したものではないと宣言しているようなものでしかない。この書は旧版になったとは言え、現今の世界歴史の書の実情をよく表しているので敢えて引用する次第である。一つの筋を貫き通してこそ学問、科学になるのであり、この一つの筋、全体を貫き通してまとめあげるものが一般論である。

(6) 世界歴史の意義

このように説いてくると「国家として現象しているのなら、その国家としての現象を説けばいいので

はないか。なぜ、わざわざ社会的労働などと難しくして把える必要があるのか。それに、人類の歴史などという大げさなものが我々にとって何の役に立つのか」といった疑問が提出されるかもしれない。

世界歴史の意義は、人類の歩んできた道のりを理解して、それを我々の生き方に役立てることにある。世界歴史は個人の生き方、個人の教育に役立つのである。それはなぜかと言えば、我々人間は類的存在であり、一人ではなく全体として人間、人類だからである。したがって、我々が人間としてしっかりと生きなければ、人類の発展の流れに自分を位置づけ、人類の発展の流れに合わせて生きるように努めることが重要になってくる。そのためには、人類の発展の流れ、歴史を知らなければならない。

また、全体として人間、人類と言うことは、逆に我々一人一人にも人類としての一般性は貫かれているのであり、個は個なりのレベルではあっても人類の歩みをそれなりに繰り返す、人類の発展の成果を受け継げるだけの可能性を秘めているということでもある。ドイツの哲学者ヨゼフ・ディーツゲンも以下のように、哲学の歴史は私の一身上に繰り返したと述べている。

「私は幼少のころから緻密な、体系的な世界観に対する要求から思索しはじめ、そしてついに人間の思惟能力の帰納的認識において満足を見出したと思っているので、その限りにおいて哲学の歴史は私の一身において繰り返されたと云ってもいい。」（ディーツゲン、小松攝郎訳『人間の頭脳活動の本質』岩波文庫）

このように説くと、「それはディーツゲンが勝手に言っていることだろう」と言う反論もあるかもしれないが、現在の我々にしても、学校教育等で、知識レベル、技術レベルでは、先述のような暦の基本を学び、ピュタゴラスの定理を学び、アラビア商人が普及させたアラビア数字を学びといった具合に、人類の歩みを個として繰り返しているのである。だからこそ、現在でも技術レベルの発展がなされるの

であり、その一方で学的レベルの歩みは現在の学校教育ではほとんど繰り返されていないから、学的确立とか学的発展ということはほとんど見られないのである。

そして、この繰り返しということは、実はヘーゲルが『精神現象学』で説いていることでもある。この書で、ヘーゲルが目指したことは、真理に到達できるか否かは本人の持って生まれた才能次第、哲学は学ぼうと思って学べるものではないというシェリングなど当時の哲学者の見解に対して、どうすれば哲学が学べるか、真理に到達できるのかという客観的な道のりを示そうということであったと思われる。

その道のりが、人類の認識の発展の歴史、哲学の歴史を繰り返すことなのである。だからこそヘーゲルは後に『大論理学』の中で、「二律背反」を提示したカントを、結論は間違っていたとしながらも、以下のように賞賛したのである。

「弁証法は往々一つの技術と見られ、主観的才能に基づくもので、観念の客観性には属さないものであるかのように見られた。…カント哲学において…弁証法が再び理性にとって必然的のものであることが認められたということは、一つの限りなく重要な進歩と云わなければならない。」（ヘーゲル、武市健人訳『大論理学』下巻、岩波書店）

このように、人間が人類の発展の成果を受け継げるということが世界歴史の成立する所以であるが、世界歴史を受け継ぎ発展させた国家、民族等は、人類の歩みの成果を品物でも受け取るように直接的に受け取ったわけでもなく、それまでの発展を担った民族、国家の歩みを機械的に繰り返したわけでもない。そうではなくて、それまでの発展を担った民族、国家、優秀な文化を誇る民族、国家に強烈にあこがれ、何とかその成果を自分たちも得たいと考えて、相互浸透をはかり、自分流に取り入れていったのである。だから、更にその先に歩いていくことができた、言い換えると人類の歩みが成立したのである。

このように説くと、「あこがれて取り入れて垂流になったというのであればわかるが、どうしてあこがれていたはずの民族、国家が先を行く民族、国家を越えてさらに先にまで行けたのか、おかしいではないか」と反論されそうである。

しかし、これは強烈にあこがれていた民族、国家は頑張り方が違ったからであり、違わざるをえなかったからである。これは一つには、学の世界で一家をなしたものと、これからなんとしても自分の説を立てなければならぬ人間の違いのようなものである。

もう一つには、生活環境が異なっていたからであり、それだけに取り入れることは困難を極めても単なる物まねには終わらず、更なる発展が可能となったのである。自分なりに消化して取り入れなければならなかったし、概して生活環境に恵まれた場所が文化的にも先行したから、あこがれる方は二重の意味で大変であり、頑張らざるをえないのだが、それがプラスに働いたのである。

学的世界で言えば、いわゆる才能のある人間が先に専門家として成功し、才能のない人間が何とか自分もあなりたいと頑張るようなものである。

それでは追い越すどころではなく追いつくことすら出来ないではないか、と反論されそうである。しかし、困難なところほど見事なものが出来上がるのである。たとえば中世のヨーロッパは、古代オリエント等と比較すれば土地の生産性は極めて低かった。それだけに、逆に生産性をあげる技術は、古代オリエントよりもはるかに見事になっていったのである。

したがって、世界歴史を担う場所は次々と代わっていったのである。つまり世界歴史は、ヘーゲル流に言えば場所を変えて遍歴するのである。

「個人のうちにある実体は、というより、世界精神そのものは、これらの諸形式を時間の長大なひろがりのなかで遍歴し、それぞれの形式において、可能なかぎり自分の全内容を形態化して現わしつつ、世界史の巨大な労働をひきうけることに耐えてきた。」（ヘーゲル、山本信訳『精神現象学序論』『世

界の名著 ヘーゲル』所収 中央公論社）

このヘーゲルの言葉を唯物論の立場から説くならば、それまでの文化の中心地とは異なる場所、異なる生活基盤においてそれまでの文化に強烈にあこがれ、それまでの文化を取り入れるという困難極まる労働に耐えた国家、民族のみが新たな世界歴史の形式・段階への文化的発展をとげ、こうした歴史を積み重ねることによって世界歴史が形成された、ということである。

世界歴史の究明とは、このように人類のたどってきた道のりを明らかにするものであり、直接には人間とは何か、社会とは何かを知る大きなたがかりとなる。つまり、どのように生きるべきか、どのように社会の発展をはかるべきかの指針となるものである。

また、これは社会の発展の道のりを明らかにすることによって、政治学、経済学といった個別の社会科学、つまり社会のあり方の特定の面に焦点を当てて究明を進める科学のための道筋を示すということでもある。というのも、これらの個別の社会科学の究明もその歴史的発展を見て取ることが不可欠であり、そのためには肝心の社会の歴史的発展がわかっていることが前提となるからである。

社会の発展の歴史を無視して政治や経済といった個別のものの歴史的発展だけを究明しようとするのは、生命体の進化の歴史を無視して心臓や肝臓だけの歴史的発展を見て心臓や肝臓を理解しようとするようなものである。これでは、心臓や肝臓が何かも、その歴史的発展もわからなくなる。まして、政治や経済は心臓や肝臓のように実体そのものではないから、本当に政治、経済と分けていいのかということすら、わからないということになってしまう。

(7) 唯物論と観念論

さて、このように説いてくると「先ほどから唯物論とか観念論という言葉がよく出てくるが、これらは一体何か」という疑問が提出されるかもしれない。唯物論とか観念論といった言葉は、簡単に言ってし

まえば、この世界そのものの大本をどう把えるか（これを世界観とよぶ）ということに関する哲学用語である。

この世界の大本は物質であり、世界はすべて物質的に統一されており（物質でまとめあげられており）、精神とよばれるものも物質の一つの機能（働き）だとする考え方を唯物論と言う。逆に、この世界の大本は精神であり、物質も精神的なものが生み出したとする考え方を観念論と言うのである。

右のように説けば「そのような哲学用語が、世界歴史と何の関係があるのか」とう疑問の声があがろう。しかし、学問とか科学といったものは本来すべて、唯物論か観念論のどちらかの立場に立ち、その立場から自分の究明の対象とするものを説ききらなければならないのである。そうでないと、対象の究明に筋を通しきれなくなり、一つの体系としてまとめきれなくなってしまう。この意味で、どちらの世界観に立つか明らかでないものは、学としての形式を満足していないということになる。

では、どちらかの立場に立てばいいのかと言えば、たしかに形式としてはその通りである。しかし、観念論の立場に立った場合には、大きな問題が生じてくる。それは何かと言えば、観念論の立場に立ったのでは認識の生成発展がきちんと説けないということである。

このように説けば「それは唯物論の立場に立てば、の違いではないのか」という声が早速にあがることになる。しかし、唯物論の立場に立てばではなく、観念論の立場に立てば、である。

それはなぜか。観念論の立場というのは、この世界の大本は精神であり、認識、精神はあらかじめ存在するのである。したがって、認識の誕生が説けず、認識が外界の反映像であることがしっかりと説けなくなってしまうのである。なぜならば、すでに存在するものの誕生は説きようがないのである。ヘーゲルは『大論理学』で「有」から説き始めるが、この「有」はその正体は精神なのである。

「それでいったい何がまずいのか、世界歴史の理解にそれがどう関わってくるのか」という声があが

るかもしれない。しかし、観念論では最初から認識、精神が存在しているだけに、人間の労働による外界との相互浸透によって認識が生成発展していくという、世界歴史の誕生、発展に関わる大問題が説けないのである。人間は労働によって頭の中の像を発展させていくのであるが、これは唯物論の立場からでないと言えないことである。

世界歴史の原動力は社会的労働による地球との相互浸透であるが、より具体的にはその社会的労働の基盤となる場所が異なることによって、労働のあり方が異なる、労働が質的、量的に発展するということであり、それによって外界の反映が異なる、反映が質的、量的に深まる、ということである。

異なる場所で発展を繰り返すからこそ、単に労働や外界の反映が異なるだけではなく、質的、量的な深まりがあるのである。だからこそ、頭の中の像そのものの発展があるのである。この過程の積み重ねが世界歴史であるが、観念論では、この一番重要な過程が説けないのである。

また、すでに述べたように、ヘーゲルは『哲学史』と『歴史哲学』を別々に説いた。観念論であれば精神が戻る場所が元々あるから、別々に説いても元の場所に戻れる。しかし、唯物論の立場に立てば、像は頭の中に自分自身で創り上げていくものであり、戻る場所などは無いのである。

したがって、両者を一体として反映させて像を創り上げていくのと、別々のものとして反映させていくのでは、脳細胞に成立する像のレベルが異なってくるのである。

しかし、この像の問題を説くためには、冒頭に説いたように生命体の進化、発展が人類への道を説かなければならない。こうしたことをふまえて、唯物論の立場に立った科学的な世界歴史の構築がはかれるのである。

—志半ばにして逝かれた加藤先生を悼んで、最近の論文を『学城』第6号（日本弁証法論理学研究会 編集 現代社 2009）より転載させていただきました— 研究紀要委員会